

◇原爆の記憶はそら豆の焦げるにおいとガラスの音

奈良市在住 秋山勝彦氏

紀元 2600 年（1940 年）1 月 1 日生まれの僕は 5 歳 8 ヶ月でした。8 月 6 日、朝早く空襲警報があった。それがやんだ。どういうわけか家の前の道に出て、空を見ていた。真っ青な空。はるか向こうからキラキラきれいな 3 機の飛行機、美しく輝いていた。「あ、B29 や」とみんなが口々に言う。1 機からポッと何かを吐き出した。「あ、落下傘や」それが観測機で、落とした途端、周りが真っ白になった。恐ろしくなって「おかあちゃん」と言って玄関に入った途端真っ黒になっ



た。気がついたら、八畳の畳の上にいた。玄関から吹き飛ばされた僕の上には、畳、姉、ガラス戸が重なっていた。母は、お正月に着る真っ白のうさぎのセーターを着せて、家から逃げるように急かされた。嫌なにおいがした。乾燥したそら豆をフライパンで炒る時の強烈なおい、僕はこのそら豆が大嫌いだった。まさにその強烈なおいだった。そして、ガラスの破片の上を裸足で歩いていった。足の下でキュ、キュとガラスのすれる音がした。その時の古傷が今でも残っている。広島を街を見下ろす双葉山の上についたとき、僕は不思議なものを見た気がした。真っ黒な子どもを見た。僕は足や背中がガラスで切れて歩けなくなっていて、母親にそこで待っているように言われた。僕の横にいた真っ黒な人が母に「死んでもよか、水を飲ませてくれませんか」と話しかけた。あちこちで「水を飲むな」「飲ませるな」の声が飛び交っていたが、母はやかんのふたに水を入れてあげると、その人は一気に飲んだ。

その後、僕は一人で山の上で燃える広島を街を見ていた。雨が降ってきて僕の白いセーターに黒いしみがついた。赤十字の看護婦と兵隊がまわってきた。僕を見て兵隊が首を横に振ったのを見て、「僕、大丈夫です」と言いたかったが声が出ず、「ウンウン」とうなずいた。看護婦さんが僕の胸の上に乾パンの包みを置いていった。母が戻ってきた。僕の家は焼けていないが危ないと、その日は川のそばで野宿した。右に見える広島を街がこうこうと燃えている。これはとんでもないことが起こっていると思ったが、原爆とは知らない。僕は 3 日間寝ていたのか、失神していたのか、3 日後に夜露で初めて気がついた。家は屋根がなく、家財道具もふっとんでいった。

これが 8 月 6 日から 9 日の全記憶です。75 年経ちますと、だんだん記憶が薄くなります。なんでも体験するのがいいといいますが、戦争だけは体験して学んではいけない。話を聞いて想像力を豊にして学ぶものです。